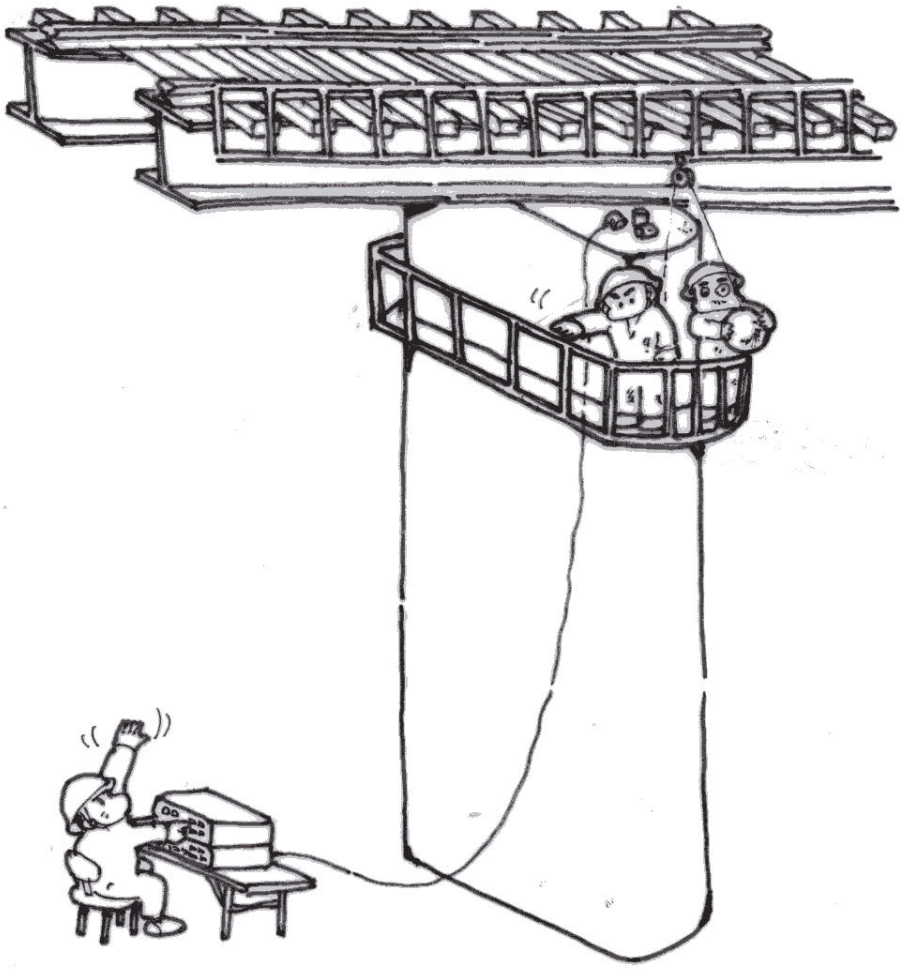
001　健

	作品名	出版社	著者	コメント	評価
1	口笛吹いて	文春文庫 ㊤570円	重松清	少年時代の夢が叶えられる事は稀なことだ。中にはつかみかけた夢を取り逃がす者もいる。表題作「口笛吹いて」を含む短篇5作。 重松作品の描くところの多くは挫折感を持つ中年だ、少年時代から青年，大人、親へと成長する過程をその時々の感情を懐かしみながら描く。またある時はそんな親を持つ子供側からも描いている。暗い気持ちにはなるものの救いは現実は避けられないものの何らかの光が見えて結末を迎えるところ。 【口笛吹いて】は偶然再会した少年の頃のヒーローはプロ野球から注目されていたが肩を壊しその後負け続けの人生を歩んでいた。主人公は昔のように胸を張って生きてもらいたいと願う。 【タンタン】タンタンは熱血教師を挫折した中年教師。今では生徒から馬鹿にされている。主人公の香奈はそんなタンタンに自分の父親をかぶせやきもきするがある日タンタンが息子にスパルタ教育している場面に遭遇する。 【かたつむり疾走】はリストラされた父親を子供側から現実を踏まえた視線で描いている。 【春になれば】息子を二才で無くした元女性教師は4年ぶりに教職に復帰。問題児のレオくんを叱ったところいじめをでっち上げられる。 【グッドラック】離婚、老人の徘徊などの問題を孕む作品。妻は家にいるべきと思う主人公が迷込んだ徘徊老人と「人生ゲーム」をしながら人生のあゆみに思いを馳せる。	
2	カレー放浪記	創森社 1470円	小野員裕	生まれつきカレーが好きだという著者がひたすら旨いカレーを求めて食べ歩いた放浪記。 昨今、辛さを競う店が多いのも何だなあと思うが著者の「カレーは辛くなければ」という主張には共感できる。著者は「横濱カレーミュージアム」の名誉館長でもある。 杉良太郎などは売れない頃360日カレーばかり食べていて黄色い涙が出たなんて エピソードがある。	
3	追憶の東京 下町、銀座篇	河出書房新社 1575円	小針美男　絵・文 川本三郎　編・文	東京の名も無き風景を当時からスケッチしていた画家のペン画と当時の思い出。これに映画評論や昭和に関するエッセイを書き続けている川本三郎がコメントを寄せながら編集。面白いのはスケッチした場所近辺で入った店の出納表が掲載されているところがリアルだ。	

4	横濱 2006年秋号 Vol. 14	神奈川新聞社 500円		【特集】ヨコハマ秋の風景と散歩道 横浜の都会・郊外の秋を紹介横浜は銀杏が良く似合う街でもある。 町の記憶「鶴見区生麦」に父の姉さん(94歳)と菩提寺の住職が寄稿していた。	
5	水銀虫	集英社 1575円	朱川湊人	何気ない光景がある日おぞましいものに反転する時、人の心の中に巣食う罪悪感が自殺・殺意に変わった時。具現化するのが水銀虫。救いのない失望感がゆっくりと不気味に迫るホラーの短篇7作。 【枯葉の日】喫茶店で出会った娘の奇妙な行動。 【しぐれの日】少年は雨宿りしたアパートに住む若夫婦と仲良くなるが2人には秘密の関係があった。 【はだれの日】姉の人生を狂わせた女を殺した少年の供述 【虎落の日】事故で孫を無くした友人宅へ孫を連れて訪れたがそこで出された食事とは。 【薄氷の日】クリスマスイブに恋人からのプロポーズを待つ主人公。かっていじめた同級生がこの日に限って姿を現すことに恐れおののく。 【微熱の日】田舎の小学生が山奥の祠で出くわしたもの。 【病猫の日】図書館の館長の妻は鬱病に苦しんでいた。	
6	北方領土 「特命交渉」	講談社 1680円	鈴木宗男 佐藤　優	今、2006年8月16日に起きた根室のカニかご漁船「第31吉進丸」の拿捕事件を契機に鈴木宗男が行なってきた北方領土問題の特命交渉のあらましについて元外務省のロシア担当官の佐藤優と対談形式で明らかにする。但し、棚上げになっている提案については今も語れないという。内容はこれまでの双方の公式になっている見解とインサイドストーリーなどだがそういった中で返還寸前まで行ったこともあったそうだ。 中には交渉団体の理事になっていながら解決すると居場所が無くなることを恐れ引き延ばしにかかる者もいるとの事だ。こういうことはやはり交渉の妨げにならない限り双方の情報公開を常に行なう必要があると痛感する。	
7	地下鉄に乗って	講談社文庫 580円	浅田次郎	地下鉄の駅の出入口がタイムトンネルとなったり主人公のxxと同じくタイムスリップするヒロインとの関係は目新しいアイデアではないが昭和の雰囲気が良く描かれている。ストーリーは反目する父親の生きてきた時代・行き様を何度かに亘るタイムスリップで全容を知るという自分探しの物語でもある。	

8	僕の昭和歌謡曲史	講談社 ㊤1000円	泉　麻人	ラジオ番組などで思い出の曲のリクエストを募っているがこの本は著者にとっての自分史でもある。その時折に流行っていた曲の感想、時代背景、加えて発表時の芸能界の動きについても触れているところが同時期を過ごしてきた自分にとっても懐かしく共感できる部分が多い。	
9	ダ・ヴィンチ 2006年11月号	メディア ファクトリー 450円		特集 「本当に売れっ子作家になれる文学賞はどれだ？」 文学賞というのも、箔をつけるためとか売るための事情があるのだろうと思わせるほどこんなに賞があるとは思わなかった。数ある新人文学賞を掲載し読者の認知度、注目度や応募数、受賞作家の活躍度などを調査し賞の実力を数値化している。	
10	缶詰大博覧会	センチュリー書籍編集部 ㊫鶴見図書館		缶詰が日本に入ってきて約130年、創世記から昭和40年代までの缶詰ラベルを掲載。米国から習った石版技術と浮世絵や錦絵の技術が合体して格調高いものに仕上がっている。外国への輸出を狙って食材の他に桜や富士山、日本の風景などをあしらっているものもあり一つのアートと言ってよいものだ。基礎知識として缶詰の利点、詰め方、食材の案内、利用術、缶の表記などにも触れているほか同一食材についてメーカー毎の美味しさ度について比較する覆面座談会「どの缶詰が美味しいか？」や、缶詰の定番であった鯨の話、缶詰愛好家のインタビュー記事などなかなか面白い構成となっている。	
11	名探偵の掟	講談社 NOVELS ㊫鶴見図書館	東野圭吾	推理小説というのは謎が明らかになるとどこかおかしいと思う箇所がいくつかはあるもの。そこをうまくはぐらかしたり疑問を抱かせないようにするのが作家の腕だ。この本は推理小説のお約束に挑戦する怪作だ。名探偵とダメ警部のコンビが推理小説のタイプ別に起きた事件を解決するが密室嫌いの探偵が出てきたり、作中人物が自分に疑問を持つあたり中々の怪作。	
12	文豪ナビ 夏目漱石	新潮文庫 420円	新潮文庫・編	この手の本は根っからの読書好きには抵抗があるのかも知れないが批評本のつもりで読めばなかなか面白い構成だ。 作品の名場面のピックアップ、作品の背景、系統図や著名人のおすすめ文章などもある。作品を読んだ者にも記憶を呼び起こすには充分。但し、この本は少し前に流行ったあらすじ本ではないので興味をもったら実作品を読むことが必要だ。	
13	文豪ナビ 芥川龍之介	新潮文庫 420円	新潮文庫・編		

14	きつねのはなし	新潮社 1470円	森見登美彦	表題作「きつねのはなし」、「果実の中の籠」、「魔」、「水神」の短篇4作品。但し、これらの作品は登場人物が少しずつ重なっており、それぞれの口から妄想とも思い出ともつかぬ形で不思議な体験が語られる。キーワードは京都の古い骨董屋である芳蓮堂だ。店主はナツメといい時代屋の女房、夏目雅子を思わせる雰囲気。精巧な工芸品の絵が動いたり奇妙なけものが徘徊したり不思議な感覚の小説。結論がなく謎も残しっぱなしで読者に委ねてしまうのも一つの手法だ。	
15	鬼に食われた女 ー今昔千年物語	集英社 1365円	板東眞砂子	今昔物語の中から選んだ10話を新しい視点で書いた10編。平安の闇に女性のエロス、禍々しさを書き込んでいる。	
16	貧相ですが、 何か？	文藝春秋 1580円 ㊫700円	土屋賢二	「週刊文春」連載中の爆笑エッセイ。といっても本を読んで泣くことはあっても笑うことはめったに無い自分にとって「爆笑」とは片腹痛い。前途多難の四つの章に分類しているがもともと雑誌のコラムを集めたものなので章立てには何の意味もない。 日常の会話や光景を捉えお互いの心の動きを哲学風に分析している。文章構成は概ね二人称形式で師と弟子の禅問答風に仕上げている。弟子の冷静な突込みに師が押され気味に書いているところが手法と見えてあざといなあと思ってしまうのはひねくれ過ぎか。	
17	東京人 2006/12月号	東京都市出版		特集「中央線の魂　オレンジ電車よさようなら」 中央線沿線には不思議な魅力があり漫画家や文人など文化人の住む街が多い。新宿、阿佐ヶ谷，高円寺、吉祥寺はよく行ったものだ。うさお氏の好きな高田渡も荻窪の「いせや」の常連だったそうだ。この沿線はジャズ喫茶、古本屋が多いのも魅力的だった。 小特集「山口瞳の東京地図」	
18	AERA COMIC ニッポンの漫画	アエラムック 1100円	朝日新聞社	手塚治虫文化賞10周年記念として刊行されたもの。読書家の中には漫画を下に見る向きも多いが一級品の作品だって数多い。自分にとっても漫画で培った知識、生き方など糧になっている部分は大きい。	
19	地球の歩き方 入門 おとなの横浜ドリル	ダイヤモンド社		最近流行っている検定本の類。	
20	探偵ガリレオ	文春文庫 540円	東野圭吾	突然燃え上がった若者の頭、池に浮かんだデスマスク、心臓だけ腐った死体、爆発した海、幽体離脱した少年など5つの殺人にからんだ怪現象を物理学者の湯川学が同級生の刑事に依頼され解明にのりだす。湯川は悪戯っ気もあり科学の実験で有名になったぜんじろうのようだが著者のイメージは佐野史郎との事。巻末の解説を当の佐野史郎が書いている。	

21	深川黄表紙 掛取り帖【二】 牡丹酒	講談社 1680円	山本一力	以前、感想文に載せた「深川黄表紙掛取り帖」の続編。前作は短篇のシリーズものだったが今回はこれ一本の長編。その分書きこみが丁寧になりスラスラ読める。今でいう企画・販売の仕事を江戸に持ち込んだ小説であるところが時代小説といいながら違和感なく読める。今回は主人公の父親が土佐から持ち返った銘酒「司牡丹」と鰹の塩辛「酒盗」を江戸で売り出す算段を計画する。 著者が土佐の出身ということもあろうが酒のうまさが伝わってくる描写もよい。といっても酒は飲めないのだが。